

地域と学校の連携による児童の学びに向かう力の向上

— コミュニティ・スクールを活用した地域学学習活動の計画・実践・評価・改善 —

斎藤 崇人 (学校経営コース)

e-mail: saito.t.1984☆gmail.com

1 問題意識と研究の目的

学校現場において「学力向上」と「体力向上」という言葉をよく聞く。学力や体力の向上には、児童・生徒の「学びに向かう力」を高めることが重要であり、学びに向かう力を高める要因の一つとして、地域住民と児童・生徒の結びつきが関係していると考えた。これまでの経験から、地域住民が教育活動に積極的に関わる学校の、児童の学力と体力の数値に高い傾向が見られたからだ。高知県教育センター(2014)からも、地域住民との関わりが増えることで学習意欲が高まり、学力や体力の向上につながるということが読み取れる。

地域住民と学校をつなぐ手段として「コミュニティ・スクール」という制度がある。コミュニティ・スクールを有効に活用することで、児童・生徒の学びに向かう力を高め、結果として学力や体力を向上できると考えた。一方、コミュニティ・スクールを運営していくにあたり、形骸化の課題が指摘されている。その要因の一つとして、地域住民と学校職員の関心の低さがあると広瀬(2012)は述べている。学校の教育活動に対し、地域住民の協力が一方的になり、持続的な支援が難しくなることがあげられる。これを解決するには、地域の教育力向上という観点が必要である。学校教育・家庭教育・社会教育が連携・調整を図り、生涯学習という大きな枠として教育を捉え、展開することが重要であることが分かった。

2年次に、実践校のA小学校では「地域連携担当」となり、地域住民と学校をつなぐ役割を担った。A小学校では総合的な学習の時間に「地域学」を実施し、地域住民を外部講師として招き、学習活動を実施している。地域住民と学校職員が協力し合い、持続可能な教育活動を展開していくためにも、地域住民と連携した教育活動のプロセスを明確化することが必要であると考えた。本研究では、児童の学びに向かう力を高めていくために、地域連携担当の立場で、地域学を生かした地域リンク型の教育活動の計画・実践・評価・改善のプロセスを明らかにすることを目的とした。

2 研究の実際

(1)研究I

a. 計画

・単元計画案の作成及び児童用アンケート作成

総合的な学習の時間の単元計画案と、児童の学びに向かう力の変容を計測するためのアンケートを竹内(2021)と西川・雨宮(2015)を参考に作成した。学びに向かう力の尺度として、「知的好奇心」「主体的な態度」「学びの積極的関与と継続意志」という3つの観点をもとに、5項目4件法で測るアンケートを作成した。その後、授業を行う前の6月上旬頃、授業後の9月上旬、単元計画や授業内容を改善した授業実施後の11月上旬の計3回実施した。

・5学年担任との打ち合わせ

合計4回行った。第1回は4月下旬の本研究の全体説明会後に10分程度で行い、研究の協力依頼と研究の方向性について話し合いを行った。第2回は5月上旬の放課後に20分程度で行った。内容は、5学年の総合的な学習の時間の方針と、授業者として本単元に取り組む中での思いである。第3回は5月下旬の放課後に40分程度で行い、単元計画案をもとに活動場所や日程、外部講師についてなど、具体的な打ち合わせを行い、詳細まで決定することができた。第4回は6月中旬の放課後に50分程度で行い、外部講師とともに授業展開や学習用具について打ち合わせた。

・第1回アンケート実施

第1回のアンケート結果(図1)を分析すると、どの学年の平均値も3付近であったこと、学年が上がると、数値が下がっていく傾向があった。

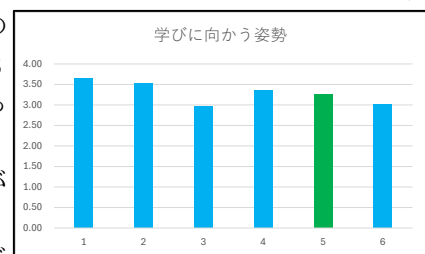


図1 第1回アンケート結果

対象学年の第1回のアンケートの平均値は、3.24であった。

・外部講師と地域学校協働活動推進員との渉外

地域連携担当として、外部講師と地域学校協働

活動推進委員（以下「地域コーディネーター」とする。）へ電話連絡を行った。外部講師には授業を依頼し、日程調整を行った。授業は天候不良で予備日も中止となったため、教室での授業への変更についても連絡した。地域コーディネーターには安全管理面でのボランティア募集を依頼した。その際、地域団体と学校活動のマッチングを提案された。水辺学習に関連する団体に依頼したが日程変更で参加できず、A 小学校での授業への参加も交通手段の問題で実現しなかった。このマッチングから、地域の教育力向上の可能性を感じた。

・授業に向けての準備

川で体験活動を行う際の安全面に配慮し、救命胴衣を着用することとし、町の社会教育課への連絡し借用した。その他の準備は、パックテストの購入のために業者への連絡を行った。

b. 実践

・天候不良のため中止

6月下旬は天候不良のため、実際には川での体験を行えなくなった。しかし、授業者との打ち合わせで、B 川の学習の前に体験活動を通すことで川に対する興味が高まるのではないのかということをはじめ、その後の学校行事との兼ね合いから、延期するのではなく教室内でできる活動への変更を考えた。そのことを講師に相談すると、他校での実践をもとに、教室でも行える活動があるという返事もらった。その際、水辺の生き物の観察は実際には行えないが、川の水さえあればパックテストによる水質調査は行えると助言をいただいた。そのため、筆者は授業当日の朝、B 川と C 川の水を汲みに行き、比較できるように2つの川の水を準備した。

・変更して行った授業内容

授業は水辺の生き物についての学習を行った。講師が、これまで撮影した水辺の生き物の画像や動画をテレビ画面に映しながら、生き物の見た目の特徴や生息域の様子等を児童に教えてくれた。また、講師自身が地元の方であるため、現在の生き物だけでなく、講師が幼少期にいた生き物や最近見ることが多くなった生き物など、D 町での体験を交えながら話をしてくれていた。3限は水質調査を行った。水質調査は、実際の川の水とパックテストを用いて行った。その他に、水の透明度を測定する筒状の実験道具を活用した。

・お礼の電話

実際に川に行き、実施することはできなかったが、外部講師と地域コーディネーターに、とてもお世話になった。そこで筆者は、感謝の気持ちを伝え

るために、再度、電話をすることにした。その際、地域コーディネーターからは、「わざわざご丁寧にありがとうございます」という言葉をいただいた。この電話で、地域コーディネーターとの信頼関係づくりに良好な兆しを感じた。用事があるときだけでなく、お礼の気持ちを伝える電話をすることで、相手に気持ちがより伝わり、良好な関係を構築できるのではないかと感じた。

c. 評価

・2回目アンケート実施と集計

図2の第2回のアンケート結果は、対象学年における平均値が3.28であった。これは、第1回のアンケートから0.04という

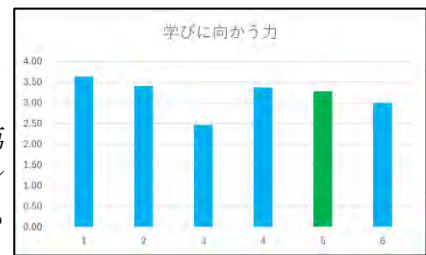


図2 第2回アンケート結果

数値の上昇がみられたことから、児童の学びに向かう力の向上について、読み取ることができると推測する。

・児童の振り返り

前期実践における児童の授業後の振り返りから、本研究における学びに向かう力の尺度の「知的好奇心」という面で、学びに向かう力が高まったと考える。振り返りに「私はCODをしてみてもっとE川でもやってみたいと思いました。」と書かれており、他の川について詳しく調べたいという意欲が読み取れる。

・前期授業実践に対する授業者の評価

5回目の打ち合わせは10月上旬の放課後に15分程度で行い、授業実践について授業者の評価を聞いた。授業は児童の学びと生活のつながりを意識させ、地域学だけでなく他の学習にも興味を広げる導入となり、学びに向かう力の向上に繋がったと評価された。その他に、児童が追求したい課題と授業者の今後の実践したい内容をうかがい、再度授業計画を立てることを伝えた。

d. 改善

・地域住民との意見交換

今回、地域住民を代表して、学校運営協議会委員でもあり地域コーディネーターでもある方にご来校いただき、子どもに対する願いや期待することについて話をうかがった。10月中旬に約30分間で行った。意見交換の場を設けるための日程調整の際、勤務後の時間で意見交換するよりも、日中の方が都合良いということもあり、私の担当の授業以外のところで調整することとなった。

意見交換において、前期の授業からの児童の様子と今後の展望について話をした。その後、地域コーディネーターの立場から授業に対し、意見をいただいた。その際、D町教育委員会の社会教育課との繋がりが示唆された。また、地域住民の意見として、地域住民同士の「交流の希薄化」が地域の課題として挙げられた。少子高齢化による人口減少の影響から、子どもがいない地域が存在し、そこでは子どもとの触れ合いを待っている。また、子育て世代の交流の希薄化から地域の結束力の低下についての課題も浮かび上がった。

また、防災教育への発展学習への可能性が、地域住民との連携で生まれた。災害時の湧き水の重要性を学ぶ授業を実施することで、地域との交流を通じてコミュニティの活性化という地域住民の願いも実現できる可能性が見られた。

・単元計画の改善

授業者からの授業の評価と地域住民の思いをもとに、単元の指導計画と評価計画の一部を変更した。授業の入れ替えを行ったのは、2時間目と3時間目についてである。天候の影響により、川遊びの体験が遅れてしまったためである。4時間目については、学習内容の変更を行った。当初の計画では、生き物が豊かにいる川から人々が生活の恩恵を受けていたことに繋がると予想していたが、児童の思考は生き物ではなく、水質のきれいさに向かっていった。そのため、川の水のきれいさと人との関わりについて学習内容と学習課題を変更し、それに合わせ5時間目も変更した。

(2)研究II

a. 計画

・授業案の作成と授業者との打ち合わせ

児童の実態調査、授業者の思い、地域住民の思いを取り入れ単元計画を作成した。後期の単元計画を進めるにあたり、導入となる授業を実施するために略案を作成し、授業者と打ち合わせを行った。

本授業において、児童の思考の流れを大切にしたいという担任の願いと、地域の交流がもっと活発になってほしいという地域住民の願いを取り入れるために、水のきれいさについての調べ学習を通し、今後の学習課題を設定できるようにめあてを定めた。この「水のきれいさ」と「人々の生活」に関係してくる場所に、学校運営協議委員の方との意見交流で出てきた「湧き水」について繋がってくる。今後、防災教育でも扱える内容でもあるので、本授業をきっかけに、次回の授業でも湧き水に触れられるようにした。それらの思いも含め、授業

者との打ち合わせでは、授業の流れと今後の展開について話をした。この打ち合わせは、10月下旬放課後に約10分間で行った。

・授業の実施に向けての準備

授業の実施にあたり準備した物は、教材となるパックテスト、E川下流域、B川下流域、B川中流域(A小近辺)の各川の水を汲み集めた。前回授業の児童の振り返りでは、調べたい川としてE川が挙げられたが、比較できるようにB川中流域の水も準備した。その他に、児童の学びに向かう力を高めるために、B川下流の水も準備した。前回の授業の様子を見てみると、児童は「地域の川や県内の他の川はどんなのだろうか」という疑問を挙げていた。その様子から筆者は、本学級の児童の実態として、思考が広がりやすい傾向が見られるのではないかと捉えた。そのことをもとに、E川下流という言葉からB川の下流も調べたいという児童の思考の広がりがあるのではないかと推測し、事前に準備することにした。

b. 実践

・2回目の実践

10月下旬に行った2回目の実践では、児童の振り返りで調べたいという意見が出てきたE川の水の水質調査を、実際に行ってみようという授業の導入から行われた。実験を行うにあたって、比較対象となるB川の水も、再度、検査することと、E川の水は河口に近いということから、B川の水も河口に近い下流の水を準備したことを伝え、児童の実験に対する興味・関心を高めてから実験に取り掛かっていた。授業時間としては5限だけで行い、今回は講師を招かなかった。

c. 評価

・3回目のアンケート実施と集計

図3の第3回アンケート結果から、対象学年の児童の学びに向かう力を測る平均値は、3.32であった。これは、第2回のアンケートよりも0.04

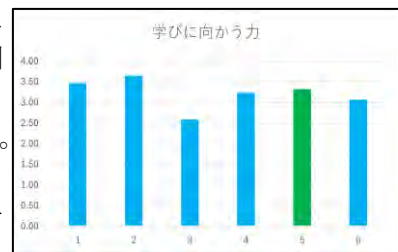


図3 第3回アンケート結果

という数値の上昇である。このことにより、対象学年は第1回から第3回まで数値が上昇し続けたと言える。また、全学年において数値が上昇し続けたのは、対象学年のみであった。この要因の一つに、今回の意図的な介入により、単元を構成し、授業を実施してきたことが考えられる。そのように推測する根拠の一

つに、今年度地域連携担当がコーディネーターとして、授業者以外の教職員が学級の授業に介入し、単元作成・授業実施したのは該当学年だけであることが挙げられるのではないだろうか。授業者以外の教職員の介入により、授業者と地域住民の連携が円滑に行われ、授業環境が充実し、児童の学びに向かう力が向上したと推測する。

・児童の振り返り

後期実践における児童の授業後の振り返りから、本研究における学びに向かう力の尺度の「学びの積極的関与と継続意志」という面から、学びに向かう力が高まったと考える。その理由を二つ挙げる。一つは、学びの継続意志である。振り返り内に「水質調査をまた別の川で実験することができてよかったです。」という文が書かれている。このことから、前回の授業においてもっと学びたいと思っていたところを学ぶことができたことがうかがえる。もう一つは、学びの積極的関与についてである。振り返り内に「私は、このきれいな川のある自慢のD町を大切にしていきたいです。」という文が書かれている。B川の水のきれいさをより深く学ぶことを通して、自分自身の行動を見つめ直したことがうかがえる。これらのことを踏まえ、「学びの積極的関与と継続意志」という面から、学びに向かう力が高まったと考える。

・後期授業実践の評価

後期の授業実践後、授業者との打ち合わせで、児童の実態に添った単元計画の変更が、学びに向かう力の向上につながったという評価をもらった。初めの単元計画案では、「川と人の関わり」について展開していく予定であったが、児童は「水のきれいさ」へと学びの方向性を示していった。その変化に計画を柔軟に調整したことで、児童の学びたいという気持ちを高められた。

d. 改善

・第3回授業に向けて

2回の実践を経て、児童はD町のきれいな水への理解を深め、自然を大切にしたいと自分事として捉え始めた。授業者は児童の生活と学習がつながること、地域住民は交流の活性化を願っている。これらを踏まえ、きれいな水がいつでも飲めることを中心に防災教育を計画し、社会教育課と連携し、防災の視点を取り入れた学習を展開していく。

3 成果と課題

本研究における成果は、児童の「学びたい」ということを授業で実現できたことである、その要因として考えられる点を二つ挙げる。

一つは計画と改善の重要性である。計画をじっくりと行うことで「教職員間や学校外部の人材との信頼関係」が構築され、児童の実態や授業の方向性等の共通理解が図れた。また、計画内容を実践していくうちに、当初の計画と児童の実態に差が生まれてきた。そのことに気付いた時、直ぐに内容を変更し、児童の実態に応じて単元計画を柔軟に変更することができた。もう一つは、地域連携担当という役職の重要性である。地域のことを理解し、精通している教職員が授業に介入することで、児童の実態に応じた地域の学習素材を提供することや、地域人材を授業に招くことができた。

以上の二つの要因が、児童の「学びたい」ということを授業で実現することに繋がり、児童の学びに向かう力を高めることができたと考える。加えて、対面での打ち合わせの重要性と評価・改善を繰り返すPDCAサイクルの有効性も、学習環境を整えることに繋がり、児童の学びに向かう力を向上させた要因の一つであると推測する。

本研究における課題として以下の二点を挙げる。

一つは、地域住民のニーズ把握についてである。地域と学校の協力体制が、持続可能な関係性を維持していくには、学校で行われる教育活動が、お互いにとって利点のある活動にしていかなければならない。そのため、日頃からの関係性の構築が重要となり、情報交換が必要となる。

もう一つは、地域連携担当というような「コーディネーター役」の重要性の認知についてである。本研究では、地域連携担当としての立場から関わることができたが、実際にはこのような分掌に、教職員を追加して人材を確保することは厳しいことが想定される。

(参考文献)

- 高知県教育センター (2014). 児童生徒のキャリア形成に関する調査研究 I ～キャリア形成と学力の関係～. 平成26年度研究紀要, 101-104.
- 竹内謙彰 (2021). 主体的学び態度尺度の作成, 立命館産業社会論集, 57(1), 79-92,
- 西川一二・雨宮俊彦 (2015). 知的好奇心尺度の作成—拡散的好奇心と特殊的好奇心—. 教育心理学研究, 63(4), 412-425.
- 広瀬 隆雄 (2012). コミュニティ・スクールの現状と課題について—学校運営協議会の役割を中心に—. 桜美林大学桜美林論考. 心理・教育学研究, 3, 17-35.